「幼なかった母の脳裡に焼きついたもの」

賀茂高校学校 昭和 61 年卒 中田（林）祥子

母は、昭和 13 年、即ち国家総動員法公布の年の 9 月 21 日に広島市で生まれ、幼年期の殆どを戦時下で過ごしています。

太平洋戦争が始まった昭和 16 年といえば、まだ三歳ですから殆ど記憶はなく、もの心つき始めた頃というと敗戦色が濃厚な昭和 19、20 年頃だったようです。

母は、昭和 20 年に当時の小学校に当たる国民学校へ入学し、それと同時に安芸津町へ疎開することになりますが、それまでは広島市幟町で過ごしています。その頃の思い出として母は、「暗い防空壕の中の話」と「B29 やグラマンの話」をまず挙げてくれました。

その頃はどこの家にも防空壕というものがあったようですが、母の場合、家の防空壕よりも向かいにある幟町教会の防空壕の方が大きくてしっかりしていたため、そこへ避難していたようです。空襲警報のサイレンが鳴ると、物凄い飛行機の爆音が聞こえ、急いで防空頭巾をかぶり、祖母に手を引かれて転げ落ちるように真っ暗な穴の中に入るのだそうです。その恐ろしさといったら、今でも夢に見るほどだと言います。

時々、祖母と別れ別れに避難することもあったようですが、そんな時、小さな母は恐怖のあまり泣きだしてしまい、近所の人に祖母が避難している所まで連れて行って

もらったそうです。

　とにかくその当時の米軍の艦載機は、相当な低空飛行をしていたようで、屋根すれすれまで降りてくるような気がしたと言い、また、操縦士の顔が見えるくらいであったとも言います。従って、その爆音は物凄かったようです。特にグラマンは恐怖の的で、「グラマンじゃあー」という声がしただけで人々は震え上がったと言います。そういう事情ですから母は、飛行機の音というのは今でもあまり好きではないと言います。

　次に、幟町にいた頃の思い出で印象的だったのは、「スパイの捜査」と「国防婦人会の訓練」だそうです。

　母の家の向かいに教会があったことはすでに述べましたが、そこの神父さん達の中に敵のスパイがいるのではないかという容疑がかかり、母の家の二階を警察が占拠し、探知機のような物で捜査したのだそうです。特に警察の鋭く冷たい眼は、幼かった母にとって強烈な印象として残ったようです。

　「国防婦人会の訓練」とは、焼夷弾の火を消すためバケツで水を運ぶ訓練と、竹槍で敵機を突き上げる訓練です。どちらも、そんな訓練で間に合うものとは思えませんが、当時はそれこそ真剣だったようです。

　幟町時代の思い出として、最後に食料事情の貧困さを挙げてくれました。三度の食

事はきちんととっていたようですが、その中味となると粗末なものばかりです。白米は銀飯といって滅多に食べられず、肉などは出回ってはいなかったようです。全ての食物が配給制で、米の代わりに大豆を煎ったもの、ふかし芋、芋がゆ、水とん、ジャガイモ等を食べ、臭い匂いのする脱脂粉乳を飲んでいたと言います。母は、麦も食べられなかったのです。おやつには、「おやき」と呼ばれる小麦粉を水で溶いて円盤状に焼いたもので、砂糖は殆ど使われていなかったと言います。この状態は、終戦後も暫く続いたそうです。

次に前にも触れたように、母は昭和 20 年に安芸津へ疎開していますが、それ以後の思い出として強烈なものは、何と言っても原爆の事のようです。と言うのは、祖母や母、叔父、叔母、伯母は当然、安芸津で 8 月 6 日を迎えたのですが、祖父は仕事の都合で幟町に残っていたのです。

その祖父は、一週間経っても安芸津へは帰って来ませんでした。そこで、心配でいてもたってもいられなくなった祖母は、母と叔父を残し、伯母と当時小さかった叔母を連れて広島へ祖父を捜しに行ったのでした。

祖母と母の姉妹が広島の救護所で祖父を見つけた時は、それはもう涙をながして喜んだそうです。そして数日後、祖父も祖母らも無事に帰って来ました。

それから母が祖父から聞いた話は、本当に恐ろしい原爆の体験談でした。

祖父は、その晩寝ずに話し続けたそうです。その話とは、脳味噌が飛び出したまま赤ちゃんがお母さんの胸の中で死んでいった話。全身焼けただれたオバケのような人達が、無言のままゾロゾロと行進していく話。川の中で髪を振り乱した女の人が流されて行く話。どれもこれも、この世のものとは思えない光景だったそうです。

しかし、何と言っても一番印象に残っている話は、祖父が、知り合いの娘さんを助けて逃げる話です。祖父は、爆心地とそんなに離れていない幟町の家で被爆したのです。「ピカッ」と光って「ドーン」と来た後真っ暗で、とにかく光のある方へもがいてはい出たのだそうですが、祖父は家の下敷きになっていたのです。その時、五寸釘が太ももにささり、貫通して引き裂かれてしまったのです。その傷は、今でも大きくその跡を残しています。そんな状況ですから、助かったこと自体奇跡と言っていいくらいです。

さて、崩れた家からはい出た祖父が見たものは、正に地獄そのものだったのです。近所の知り合いの娘さんが、崩れた家に挟まれている両親を助けようとして、泣きながら燃え上がる火に向かって必死に手を伸ばしている姿をみたのでした。

祖父は、その知り合いの夫婦を何とか助けようと努力するのですが、自分自身が怪我をしていて力が十分に出ない上に、崩れた柱も重いためどうしてもだめだっようです。

そのうち、段々と火が近づいてきます。知り合いの人はとうとう「逃げて下さい。娘を頼みます。」と、何度も何度も言いながら炎の中に消えていったのでした。祖父は、泣きじゃくる娘さんを連れて、川を泳いでわたり、また炎の中を逃れて己斐の方まで逃げて行ったと言います。

それからその娘さんとは、何らかの事情で結局、別れ別れになってしまったのですが、今、どこでどうしておられるのかわからないそうです。

祖父は、原爆を受けた時、まる裸で逃げ出したと言います。そのためその後着る物がなく、結局配給されていたサッカーで出来たスカートと、女物のブラウスをきていたらしいのです。

そんなかっこうでその後も祖父は、怪我のひどい人の世話をしていて、安芸津へ帰るのがずっと遅れてしまったのです。そして安芸津へ帰ってから祖父自身も原爆症で苦しむのです。

高熱が続いて歯ぐきは腫れ上がり、血が出て歯がガタガタになったのです。医者からは「肺気腫という病気じゃ。もう助かるまい。」と言われた程でした。

しかし、奇跡的に何とか一命はとりとめることが出来たのですが、今母が言うには、当時は食料が無くて、”よもぎ” や”あかざ”などの野草や海藻を混ぜておひたしにして食べさせたのが良かったのかも知れません、と。

また祖母も、二次放射能を浴びたためか、それまで元気だったのに、身体のどこが悪いというわけではありませんがとても弱くなってしまったそうです。そんな生活が三年間も続いたと言います。

そんな状態ですからまともに働く事など出来ません。従って、相当長い間売り食いの生活が続いたそうです。

昭和 23 年、一家はやっとの思いで広島に帰りますが、貧しい生活は相変わらず続いていたようです。そんな中で母は、当時、油、砂糖、酒等の卸しをしていた西条の林家へ養女として貰われていき、三年後の昭和 26 年になって正式に養子縁組ということになります。

西条へ来てからは、食料には殆ど困るということはなくなったと言うことです。と言うのは、油や砂糖そして酒がお米と交換して貰えたからなのだそうです。

今回、母からこの話を聞くに当たって、何十年も経った今でも、昨日のことの様にはっきりと記憶されていることに大変驚きました。それだけ強烈な印象として残されている「戦争・原爆」の非人間性を私達はしっかりと受け継ぎ、二度と戦争を起こさぬようにしなければならないと思います。そして、こうした体験談を多くの人達に知ってもらいみんなの力で絶対に戦争を起こさないようにしなければいけません。